

滅びゆく古典学

徳 永 宗 雄

They lay upon the bed each turned aside
and suffering in silence:
though love still dwelt within their hearts
each feared a loss of pride.
But then from out the corner of their eyes
the sidelong glances met
and the quarrel broke in laughter as they turned
and clasped each other's neck.

昨年七月十七日、ハーヴァード大学で五年間私が指導を受けたダニエル・インゴルス教授が八十三歳で他界された。死の直後、『ニューヨーク・タイムズ』は紙面を割いてサンスクリッ

ト古典学での彼の業績を講えるとともに、彼の *Sanskrit Poetry* から上の詩（古典インド最高の恋愛抒情詩『アマル百頌』の一節）を選んで紹介し、一人の偉大な文人の死を悼んだ。私が学生であった頃、インゴルス教授はサンスクリット文学を教えるかたわら、一部の学生とラテン語の詩を読んでおられた。サンスクリットの予習で徹夜を続けていた私は友人からそのことを聞いて驚くとともに、そのクラスに出ている学生たちをつらやましく思ったものである。ハーヴァード大学退職後、先生は故郷バージニアのホットスプリングズに戻り、もっぱらギリシャ悲劇を読んで余生を送られたという。インゴルス教授は厳格な文献学者であると同時に東西の古典に通じた偉大な文人でもあった。先生から私は、サンスクリット文献の厳密な読解方法とともにサンスクリット文学を味読することを教わった。今日、

このような人文学者にお目にかかることは殆んどない。日本の大学には個別文献の研究者は掃いて捨てるほどいるが、崇高な美を広い古典の世界から汲み取れる学者、つまり私のいうところの古典学者の数は極めて少ない。いまや、学問分野は極度に細分化され、研究の分業体制は確立し、研究者のサラリーマン化は極限に達している。人体が解体されるように知は分断され、生気を失い、「知の共同体」たるべき大学は学位という免許の発行機関となっている。行政法人化するまでもなく国立大学はすでに高等教育行政機関と化しているのである。

大学が誕生して以来古典学は大学と深い関わりをもってきた。最初期の大学であるボローニヤ(1158)、パリ(1175)、オックスフォード(カレッジの成立は十三世紀中葉)、ケンブリッジ(1209)では、いわゆる「自由七科」のうちの三学(文法学、修辞学、論理学)の基礎資料としてギリシャ・ラテンの古典の学習が重視された。一方、中世ヨーロッパの大学と異なり、日本の大学では文系と理系の学部が明確に分けられている。文と理の分離は明治期の大学制度にまで遡るが、現在の日本の文系学問、とりわけ古典学のいびつな姿の出発点がこの分離にあると私は考えている。

中世ヨーロッパの大学は、神学、法学、医学などの分野の専門職業人の養成に重点があったため、古典の知識もいきおい専

門職業人として成功するための素養としての面を持つていた。これを変えたのが、一八一〇年にベルリン大学を創設したウィルヘルム・フォン・フンボルトである。彼は、古典の知識を人間の付加価値としてではなく人格陶冶の原理として捉え直し、古典学を大学教育の根幹に据え、同時に、外的権威からの自由と世俗からの孤立を主張して、自律的な知の牙城としての近代的大学の礎を築いた。フンボルトの大学の理念は、ハーヴァード大学(一六三六年設立)を含む諸外国の大学にも大きな影響を与えている。

ハーヴァード大学のキャンパスは、the Yardと呼ばれるメインキャンパスを中心に構成され、the Yardの中央にワイドナー図書館があり、そして、ワイドナー図書館の中心に古典学、哲学等のデパートメントが位置している。ワイドナー図書館はまた、学術大学院(Graduate School of Arts and Sciences)の中核的施設でもあり、専門職従事者の養成を課題とするロースクールやビジネススクールは学術大学院を取り囲んで、惑星のようにケンブリッジ市内や隣接するボストン市の一角に配置されている。翻って私が所属する京都大学を見ればどうであろうか。大学のメインキャンパスの大部分を占めるのは工学系の建物であり、文系の建物はそれらに挟まれるようにして建っている。国立総合大学のどこでも基本的にこの構造は変わらない。大学院文学研究科からハーヴァード大学に留学した私は、最初、文学

部がどこにあるのか懸命に探したが遂にそれを見つけることが出来なかつた。文学部が日本の大学の特異な制度であることにその時気付いたのである。

周知の通り、明治政府はドイツを含む欧米諸国の大学制度をもとに日本の大学のシステムを造り上げた。当時のドイツはベルリン大学創設時から半世紀を経過しており、フンボルト主義はすでに衰退の方向に向かつていた。フンボルトが掲げた「孤立と自由」は依然継承されてはいたが、人格陶冶を目的とする古典教育はもはや重視されなくなっていた。この傾向を促進したのが十七世紀から十八世紀にかけてヨーロッパに広まった啓蒙主義に端を発する科学革命の波である。科学革命は当初アカデミーなど大学外の団体で始まったが、ハレ大学(1697)やゲッティンゲン大学(1734)を通じて大学内に浸透し急速に発展し、十九世紀後半には、自然科学の分野でドイツの大学が世界をリードするまでに成長した。そして、世界中の研究者や学生がドイツの大学に留学し、ドイツの大学教育の特徴をなすゼミナール制度を故国の大学に持ち帰ったのである。日本も例外ではなかつた。明治政府からドイツに派遣された研究者の多くは帰国後帝国大学の教授に任命され、「孤立と自由」を標榜する象牙の塔の中でゼミナールを通じて学生の指導に力を入れた。

明治十年、明治政府は東京開成学校と東京医学校を併せて、

法、理、文、医と予備門からなる東京大学を創設した。さらに、明治十九年には帝国大学令を發布して、大学の使命を「国家ノ須要ニ応スル學術技芸ヲ教授シ及其蘊奥ヲ攷究スルヲ以テ目的トス」と定め、同時に、工部大学校(のちの工学部)を合併して、東京大学を法、理、工、文、医の五分科大学と大学院からなる東京帝国大学に改組した。ところで、帝国大学の設置形態には四つの特徴が認められる。(1) 国益のための大学、(2) 文系と理系の分離、(3) 工学(実学)の重視、(4) 教養教育(リベラルアーツ「自由学芸」)の軽視(5) 芸術系の大学からの排除である。学問の自由と大学の自治はある程度認められたが、国家から見れば大学は富国強兵を進め欧米列強に追いつくための機関に他ならなかつた。文系と理系の分離が日本の古典学広くは人文学に致命的な影響を与えたことについては上に触れた。この特徴と関連するのが第三点の工学(実学)の重視である。これも日本の大学制度の特徴であり、この特徴は、科学技術立国を標榜する現政権にいたるまで何ら変わっていない。大学の一部としての工学部はフランスにもドイツにも存在しないものである。日本の大学制度に見る工学系の重視は、一八六〇年代に技術を大学に取り入れたイギリスの高等教育政策の影響によるものかも知れない。

第四に挙げた教養教育の軽視は戦後日本の大学制度において特に著しい。フンボルトが主張した人格陶冶のための教養教育

は旧制高校に継承されたが、戦後になって旧制高校は教養部ないしは地方大学に改組され亡くなってしまった。さらに、ここ十年間、文部省は国立大学の教養部を解体し、教養教育の基盤の破壊に邁進してきた。「知の総合」を志向する古典学は、古典教養教育の母体を亡くしその息の根をとめられてしまったのである。

第五に挙げた研究教育の大学からの芸術系の排除は、富国強兵のために帝国大学を設置した明治政府が、質実剛健たるべき学生を「軟弱な」芸術から守るために、諸芸術を芸術学校の中に隔離したものである。人間本来の創造性の発露として芸術活動に優るものはない。日本の総合大学から芸術系が排除されたことから「創造の場」としての大学の機能が低下し、同時に、芸術との深い関わりの中から遂行されるべき人文諸学は創造力の源泉を失い、自然科学に追隨して要素還元主義の途を突っ走ってきた。このような状況の中で、今後日本の大学が古典学研究の担い手となることに私は極めて悲観的である。大学は市場原理で運営され、効率を要求され、いわゆる「役に立つ」研究のみがそこでは生き残る。人間の欲望を満たす実学研究が重視され、自然環境の荒廃が加速し、生の内実に関わる古典学が軽視され、精神環境の荒廃が一層進行するに違いない。